

日本人初級英語学習者の発音習得に対するビリーフ

藤原 愛¹⁾

Elementary Learner's Beliefs for English Pronunciation : Utilizing Factor Analysis

Ai Fujiwara

Abstract

This paper investigates Japanese student's perception of English pronunciation. The traditional way of teaching pronunciation was segmental, or the articulatory phonetics of individual sound; however, today's pronunciation training focuses on the suprasegmental features of rhythm, stress, or intonation. And a top-down approach focusing on global meaning and communication is regarded as an important feature for language learning. The idea of "good pronunciation" has shifted from "correct pronunciation" to "intelligible pronunciation." With this fact in mind, questionnaires, containing 20 questions of needs and beliefs about pronunciation, were distributed to junior high school students in Tokyo. The questions pertained to the idea of Critical Period Hypothesis and English as a Lingua Franca. Factor analysis was used to determine underlying variables and three factors in pronunciation were found: 1) positive attitude toward pronunciation, 2) unease or worry over pronunciation and 3) giving up the ideal of pronunciation. To make teaching plans, teachers should remember that these factors always effect students in various degrees and therefore they should always try to keep students motivated and respect their positive attitude toward pronunciation.

keywords : Learner beliefs, pronunciation, English education, ELF, factor analysis

キーワード : 学習者ビリーフ, 発音, 英語教育, ELF, 因子分析

はじめに

新たに外国語を学習する際に、どの言語を学ぶ際にも共通して必ず学習しなければならない技能や学習項目が存在する。発音もそのなかのひとつであるが、言語を学び始めた瞬間からその言語を

自由に使いこなせるようになるまで、もしくはその言語にいくら長けたとしても、学習者にはいかに母語話者に近い発音ができるようになるかという問題がつきまとう (Macdonald, Yule and Powers, 1994)。長い言語教育(ここではとりわけ英語教育)の歴史の中で新しい流れや教授法が生

1) 育英短期大学現代コミュニケーション学科

み出されてきたが、どの時代でも、他の技能同様、発音をどう指導するのか、発音をどう学ぶのかといった問題、そしてそれに対する研究調査が絶えることはない。発音教育の重要性を指摘する研究は多いが (Morley, 1991)、一方で指導法の確立が十分でないという指摘もあり (Wei, 2006)、指導法へのより一層の研究が望まれる分野でもある。

本稿では、発音教育の変遷と現状をふまえたうえで、今後の英語教育における発音指導のあり方を探る第一歩とし、学習者が発音学習に対してどのような姿勢で臨んでいるかを明らかにするための意識調査を以下の観点から行った。(1) 英語の発音学習の際に学習者が感じているニーズやピリーフにはどのようなものがあるか。(2) 英語の発音学習 (習得) に関してどのような要因が存在するか。

これらの結果をふまえたうえで、今後の発音教育で取り組むべき課題について述べていく。本研究では英語の発音に焦点を当てているが、ある言語における発音の研究は他の言語にも応用可能であると考えられるため、この研究が決して他の言語における発音指導の重要性を無視しているものではないことを付け加えておく。

1. 発音教育の背景

1.1 発音教育の流れ

発音と一概に言っても、この言葉をどう捉えるかで教育に対する主張、教授法は変わってくる。20世紀後半のコミュニカティブアプローチの出現により、英語教育の流れは「話された言葉 (spoken language) 」へと向かい、最近では発音教育も伝統的なドリル学習離れをし、コミュニカティブな活動の中で発音を教えることが提唱されている (Setter and Jenkins, 2005; Wei, 2006)。最も広く、また基本的な発音練習として行われてきたミニマルペアを用いた発音練習はその単調さや文脈を無視した手法のため批判を受けることが多いが、Boku (1998) は「ネイティブの英語教師は音

素の違いについてなら説明を加えないまま、ただ単にミニマルペアを繰り返す傾向にあることが問題で、ミニマルペアの練習をする際は実際の文脈の中に組み込んで指導することが大切だ」とミニマルペア自体の練習を否定するのではなく、その扱い方に問題点を見出している。実際にミニマルペアを用いた発音指導の効果があるかという調査は最近でも行われており (Lambacher, Martens, Kakehi, Marashinghe and Molholt, 2005)、音素レベルの習得に関わる指導自体が否定されているわけではない。

1.2 「よい発音」とは

この流れの中で発音教育の現場で良い「発音」に対する考え方も変わりつつあり、発音が正しいかどうかではなく、相手に理解される (intelligible) 発音かどうかにかんがわれるようになった。この背景にはさらに、英語を共通語 (English as a Lingua Franca (ELF)) と捉える動きが関係している。それまでの英語を外国語として学んでいる学習者にとって、モデルとなる英語はアメリカ英語 (GA) かイギリス英語 (RP) であり、これは学習者が英語母語話者と会話する状況を想定していたためであるが、ELF は近年の国際化に伴い非母語話者同士が英語で会話をする機会が増えたことによる。Setter and Jenkins (2005) は、発音において何をもって正しい発音とするか、学習者がどの発音をゴールとするかは他の言語層よりもより扱いにくい問題であるとしている。これは Gardner の「社会教育モデル (Socio-educational model) 」に基づくと、「目標言語が話されている社会の一員になりたい」という思いが動機付けの一端を担っているため、発音という観点で「ネイティブ並」と形容される発音に到達することは、自分の母語のなまり (accent) を消し去ることであり、それによりアイデンティティの侵害が起こると指摘している。

1.3 「発音」の何をどう教えるか

Otlowski (1998) は、発音を音素の正しい生成以上のものとして捉えなければならないとし、コミュニケーションを成り立たせるために不可欠な文法や統語、談話と同じ見方で捉えるべきであると主張している。発音の何を教えればよいかについては、コミュニケーションな観点から、先に述べたミニマルペアのような音素の聞き分けに重点を置くのではなく、韻律 (prosody) を取り扱うことが唱えられている (Eskenazi, 1999)。Wennerstorm (1999) はリズムの重要性を説くなかで、パラ言語と、イントネーションという音韻的側面の区別の必要性にふれ、語用論的または感情的な目的のためにはどこに強勢をおくかを考えて声を「操作」することが必要となり、この技術がコミュニケーションにおいて重要な役割を果たすとしている。Barrera (2004) は超分節的 (suprasegmental) な要素を教えることが学習者のパフォーマンスを向上させるとし、発音教師はまた学習者を十分にインプットが得られる本物の言語環境 (real-life language situation) に触れるよう促すべきだと指摘している。Counihan (1998) は、教師が発音に対してトーンや、表情、ボディランゲージにあまり注意を払わないのは、生徒の発話が単調で、感情のないものであったとしても、学生が口を開いたということに満足しそれ以上の不満を口にしないからだ、韻律の指導が不十分であることを指摘している。Underhill (1996) は発音ではリズムやイントネーションが重要とし、その学習方法として「頭で考えずに体で覚える (“out of the head and into the body.”)」ことを唱えている。

1.4 教師に求められるもの

現場の教師が求められているものとして、まず発音の理論的枠組みが挙げられる。Burgess and Spencer (2000) は、目標言語についての音韻論の知識は教師にとって必須であり、その知識が発音教育の成功における理論的基盤になるとし、教師

は母語と目標言語の音韻を比較して、それによって学習者が抱いているであろう発音に関する問題を予想することができる」と述べている。Dalton (1997) も英語の音声学と音韻論におけるどの要素が (学習において) 問題を引き起こしそうかという多少の事前知識を持つことが役に立つとしながらも、実際にこのような対照分析を用いている人が少ないことを指摘している。また、教師が求められるもう一つのは、生徒を心理的にサポートすることである。Otlowski (1998) は単なる発音チェッカーではなく発音コーチとしての教師であれば、教師が与えるフィードバックそれ自体が学習者の発音能力向上を促進させるであろう、「教師の学習者への接し方」に触れている。Acton (1997) は NLP (neuro-linguistic programming) が発音及び会話の指導をより効果的にするための重要な鍵を握るとし、教師が生徒に「できる」という気持ちを持たせることを推奨している。

2. 発音に対する教師の意識

これまで見てきたように、発音教育が重要であることはわかるが、英語を専門とする大学の授業は別として、中学・高校の授業では発音のみを教えることは時間的にも授業内容的にも無理がある。研究者は自分の研究対象の重要性をとることもまた仕事であり、発音の研究者が発音の学習は重要だと主張するのはもっともである。実際に教育現場にいる教師たちが発音をどのくらい重要視しているかのアンケート結果を記載した調査報告書がある (全国高等専門学校英語教育学会：高専英語教育に関する調査研究委員会, 2001)。この報告書の中で、実際に高等専門学校の教師に技能・能力に関する 8 つの項目「話す」「聞く」「読む」「書く」「発音」「単語」「文法」「文化」を 5 (重要) ~ 1 (不要) の尺度で採点してもらうというものであった。その結果、全ての項目が 5 ポイント中で 3.4 ポイント以上となっていることから、ど

の項目も教師が英語教育においてそれなりに重要であるとみなしていることが明らかとなった。しかしながら「発音」の重要度が最も低い(平均値: 3.42)という結果になっており、日本の現場における「発音」への認識が他の学習項目と比較した場合相対的に低いのではないかと考えた。また Macdonald (2002) はオーストリアでの英語教育について、なぜ教師が発音指導を避けるのかについてインタビュー調査を実施した。インタビューを受けた教師 8 人中 6 人が「発音指導は好きですか」という問いに「嫌いである」と答えている。またその理由は「教えなければならないものが他にもあるので、発音はこれら他の領域を通じて教える必要がある。」というものであった。

3. 発音に対する学習者の意識

発音教育は、時代的流れからコミュニケーションのための実用的な指導の重要性がさげられる一方、現場における二つの調査では共通して「発音」が他の指導項目よりも重要度が低いという結果となった。しかしこの結果は教師側からみた「発音」への評価であり、学習者はどのように感じているのか調査する必要があると考えた。そこで、藤原 (2012) では、「英語学習の際に学習者が重要とみなしている技能・学習項目は何か」についての調査を行った。調査の方法は、私立中学校 3 年生の生徒を対象に、全国高等専門学校英語教育学会：高専英語教育に関する調査研究委員会 (2001) のアンケート調査における「高専英語教師の意識調査」より、「技能・知識」の質問項目を抜粋し使用した。

学習者に各項目の「現時点での重要度」を 5 点満点で回答してもらった。8 つの学習項目の結果は以下のとおりであった(括弧内に平均値を示す)。「聞く (4.11)」、「読む (4.15)」、「書く (4.09)」、「単語 (4.28)」、「文法 (4.10)」の 5 項目では 4 ポイントを超えたが、「話す (3.72)」、「発音 (3.35)」、

「文化 (2.65)」では他の項目と比較して低い数値を示した。この結果、「現時点での重要度」で学習者は「発音」を「文化 (異文化理解)」に次いで重要度が低いと認識していることが明らかとなった。また将来的な重要度では、ポイントは上がったものの現時点での重要度同様、「文化 (異文化理解)」に次いで「発音」の重要度が低いという結果であった。しかしながら、「現時点での重要度」に比べて「将来的な重要度」がはつきりと高いポイントを示している項目が、「聞く (4.40)」、「話す (4.18)」、「発音 (3.82)」、「文化 (3.20)」となっていることから、学習者は将来的にコミュニケーションで必要となる、より実践的な技能が重要だと認識していることが読み取れる。

4. 英語の発音習得に対する調査

発音教育は、「正しい発音」から「理解される (intelligible) 発音」へとターゲットがかわりつつあるが、コミュニケーションに支障がでない発音を習得する必要性が指摘される一方、教師と学習者の認識は共通して「発音」が他の指導項目よりも重要度が低いという結果であった。「発音」の重要度は低いという認識の要因となるような、「発音」に対する具体的なイメージについて、学習者はどのように感じているのかを調査する必要があると考えた。

4.1 調査の目的

本調査の目的は、「英語の発音に関する学習者のビリーフ」について明らかにすることである。

4.2 調査の方法

都内の私立中学 3 年生の生徒を対象に、アンケート形式で調査を行った。ビリーフについての質問項目の作成には、言語習得の過程において大きな障壁ともなりうる Critical Period Hypothesis (CPH) や English as a Lingua Franca (ELF)

表 1. 英語の発音習得に対する学習者ビリーフ：項目別平均値

項 目	平均	標準偏差
1. 発音はネイティブ並にうまくなりたい。	3.22	1.26
2. 発音が悪いと人前で英語を話すのが恥ずかしい。	3.14	1.28
3. 海外に行かなければ英語の発音は上手にならないと思う。	2.98	1.28
4. 正しく発音できれば単語を正しく綴れると思う。	2.93	1.27
5. 発音が上手でなくとも将来困ることはない。	2.75	1.27
6. 英語を幼い頃から学んでいればいるほど発音は上手だ。	3.29	1.30
7. 日本人英語でも通じれば十分だ。	3.36	1.34
8. 発音の理論的な学習は、正しい発音をするために役立つ。	2.76	1.13
9. 学校の授業で発音学習の時間をもっとあるべきだ。	2.62	1.18
10. 英語の発音は単語と単語の音のつながりが重要だ。	3.44	1.05
11. 英語の綴りから発音を推測するのは難しい。	2.67	1.15
12. イントネーションやアクセントを学習することは重要だ。	3.50	1.13
13. 正しい発音のためには英語をたくさん聞くことが重要だ。	4.11	0.97
14. 発音の学習に時間を割いている暇はない。	2.70	1.18
15. 中学1年のときに比べると英語を発音する機会が減った。	2.46	1.20
16. 発音がうまくなる方法があるならとにかく知りたい。	3.13	1.30
17. 発音記号が読めれば正しい発音ができると思う。	3.02	1.27
18. 自分の発音が正しいかどうか自信がない。	3.54	1.12
19. 正しい発音を頭では理解していても実際に発音できない。	2.80	1.12
20. どんなに英語の知識や能力がある人でも、発音が悪いと英語ができない印象を覚える。	3.48	1.25

に関するものを含む、20個の質問項目を設定し、それぞれ5（とても当てはまる）から1（全く当てはまらない）の5つの選択肢から回答するものとした。

4.3 分析方法

これらの項目に対して以下の方法で、分析を行った。まず、各質問別に学習者の回答（5（とても当てはまる）から1（全く当てはまらない）別に人数の集計と平均値および標準偏差の算出を行った。その後、英語学習者の発音習得に対するビリーフについての全体的な特徴を捉えるため、全20項目に対して全ての項目の相関行列を計算し、因子分析を行った。初期因子抽出法には主因子法を用い、その後バリマックス回転を用いた。統計ソフトには JUMP を用いた。

3.4 調査の対象

調査の対象は都内の中高一貫の私立中学に通う3年生155名で、その中には帰国子女も数名含まれるが、人数が少ないことや海外経験がなくとも小学校から英会話に通っている生徒もおり、言語学習の背景を明確に分けることが困難なため今回はすべて分析対象とした。英語の平均学習歴は40ヶ月（3年4ヶ月）で、155人中英語学習歴が3年未満の生徒は123名であった。また、英語を学ぶ目的（有効回答数143）では、「英語が必要だと感じるから」48名で最も多く、次に「授業・受験があるから」（47名）、以下「英語の文化に興味があるから」（12名）、「その他」（10名）、「英語に興味があるから」（6名）となった。

表2 発音習得に対する学習者ビリーフ調査項目：バリマックス回転後の因子パターン行列

項 目	因子 1	因子 2	因子 3
9. 学校の授業で発音学習の時間がもっとあるべきだ。	0.791	-0.040	-0.152
8. 発音の理論的な学習は、正しい発音をするために役立つ。	0.692	0.092	0.082
10. 英語の発音は単語と単語の音のつながりが重要だ。	0.679	-0.167	0.089
4. 正しく発音できれば単語を正しく綴れると思う。	0.674	0.013	-0.163
1. 発音はネイティブ並にうまくなりたい。	0.670	-0.229	-0.482
13. 正しい発音のためには英語をたくさん聞くことが重要だ。	0.559	-0.218	-0.148
12. イントネーションやアクセントを学習することは重要だ。	0.552	-0.447	-0.084
17. 発音記号が読めれば正しい発音ができると思う。	0.485	0.382	0.049
2. 発音が悪いと人前で英語を話すのが恥ずかしい。	0.202	-0.832	-0.209
18. 自分の発音が正しいかどうか自信がない。	-0.196	-0.761	0.018
3. 海外に行かなければ英語の発音は上手にならないと思う。	0.163	-0.704	0.235
20. どんなに英語の知識や能力がある人でも、発音が悪いと英語ができない印象を覚える。	0.235	-0.608	-0.168
19. 正しい発音を頭では理解していても実際に発音できない。	0.050	-0.581	0.136
16. 発音がうまくなる方法があるならとにかく知りたい。	0.373	-0.549	-0.554
7. 日本人英語でも通じれば十分だ。	-0.381	0.038	0.990
5. 発音が上手でなくとも将来困ることはない。	-0.334	0.025	0.854
6. 英語を幼い頃から学んでいればいるほど発音は上手だ。	0.367	-0.536	0.516
15. 中学1年のときに比べると英語を発音する機会が減った。	0.105	-0.064	0.348
11. 英語の綴りから発音を推測するのは難しい。	-0.335	-0.388	-0.032
14. 発音の学習に時間を割いている暇はない。	-0.629	0.174	0.154

5. 調査結果

5.1 「発音習得に対する学習者ビリーフ」の平均値

学習者が英語の発音学習に関してどのような意識を持っているか、その全体的な傾向を見るために項目別の平均値を表にしたものが表1である。平均値が3.4以上であった上位5項目についてみてみると、最も高い数値を示したのは「13. 正しい発音のためには英語をたくさん聞くことが重要だ。」で、次に「18. 自分の発音が正しいかどうか自身がいない。」「12. イントネーションやアクセントを学習することは重要だ。」が続き、4番目が「20. どんなに英語の知識や能力がある人でも、発音が悪いと英語が出来ない印象を覚える。」5番目が「10. 英語の発音は単語と単語の音のつながりが重要だ。」という結果であった。

平均値が最も低い数値を示した項目及び2番目に低かった項目を見てみると「15. 中学1年のときに比べると英語を発音する機会が減った。」「9. 学校の授業で発音学習の時間がもっとあるべきだ。」となった。

5.2 「発音習得に対する学習者ビリーフ」の因子

上で見てきた、発音習得に対する学習者のビリーフについてその特徴を考えていくために、因子分析を行った結果、3つの因子が認められた。表2に示したのはバリマックス回転後の因子負荷量であり、太字となっている因子負荷量により因子を解釈した。

この結果より、まず第1因子には「9. 学校の授業で発音学習の時間がもっとあるべきだ。」「8. 発音の理論的な学習は、正しい発音をするために役立つ。」「1. 発音はネイティブ並にうまくなりたい。」など、英語の発音(学習)に対して好意的もしくは積極的な項目が含まれることから、これを「英語の発音学習への積極的参加」と名付ける。第2因子には「2. 発音が悪いと人前で英語を話すのが恥ずかしい。」「18. 自分の発音が正しいかどうか自信がない。」「3. 海外に行かなければ英語の発音は上手にならないと思う。」など、英語の発音に対してのネガティブな項目が含まれることから、これを「英語の発音に対する不安と苦悩」と名付ける。第3因子は、「7. 日本人英語でも通じれば十分だ。」や「5. 発音が上手で

なくとも将来困ることはない。」「6. 英語を幼い頃から学んでいればいるほど発音は上手だ。」の3つであるため、「英語の発音上達に対するあきらめ」と名付ける。今回の英語の発音習得に対するビリーフ調査の項目には以上のような因子が認められた。

6. 考察

6.1 「発音習得に対する学習者ビリーフ」の平均値についての考察

ビリーフ調査に関して、最も高い数値を示したのは「13. 正しい発音のためには英語をたくさん聞くことが重要だ。」で、学習者は正しい英語の発音を聞くというインプットが正しい発音のアウトプットにつながると考えていることがわかる。学習に関する項目では「12. イントネーションやアクセントを学習することは重要だ。」も上位に入っており、最近のコミュニカティブな言語教育の流れの中で重要視されている超分節的 (suprasegmental) な要素も発音の上達には欠かせないと認識している。また「10. 英語の発音は単語と単語の音のつながりが重要だ。」も5位にとっており、これらの結果から学習者が発音学習の際に何が重要となるか、逆に言えば何が難しいかを意識しているように感じられる。一方で2位となった「18. 自分の発音が正しいかどうか自信がない。」や4位の「20. どのように英語の知識や能力がある人でも、発音が悪いと英語ができない印象を覚える。」など、Acton (1997) が多くの言語学習者は、彼らの発音について否定的であるというように、心理的にネガティブな項目も上位に入っている。

このことから、何を学習するべきかという客観的な分析はできるが、発音学習を主観的に捉えた場合は自信のなさや苦手意識を否定できないという、ある種のディレンマを感じていることがわかる。

最も低い数値を示した項目及び2番目に低かつ

た項目を見てみると「15. 中学1年のときに比べると英語を発音する機会が減った。」「9. 学校の授業で発音学習の時間をもっとあるべきだ。」となっており、良い解釈をすれば学校の授業における発音の学習時間に「満足」しているかのように思われるが、先ほどの「技能・学習項目の重要度の結果」における発音の重要度の数値から考えると、学校の授業で発音を取り扱うことには期待していないという可能性もある。

6.2 「発音習得に対する学習者ビリーフ」の因子についての考察

因子分析の結果から、第1因子として「英語の発音学習への積極的参加」、第2因子は「英語の発音に対する不安と苦悩」、第3因子は「英語の発音上達に対するあきらめ」という3つの因子が認められた。この3つの因子は今までの考察の内容を見ると、学習者の意識を端的に表しているといえる。コミュニケーションのための英語能力が求められている今日、日本の多くの中学・高校で行われている授業で、発音のスキルを伸ばすことは決して容易ではない。自ら積極的に発音を意識し、訓練を積まなければ話すことはもちろん、聞き取りに関しても正確に行うことは困難であろう。そのような現状に対して、「英語の発音学習への積極的参加」という意識は重要であり、学習者が自主的に発音の向上に努めることが求められている。

しかし、「どのように英語の知識や能力がある人でも、発音が悪いと英語ができない印象を覚える。」の項目に代表されるように、日本人が英語の発音に対してコンプレックスを抱いていることも否めない。そもそも、「英語らしい発音」のためには、日本語の音素にはない数多くの英語の音素の習得はもちろんのこと、近年強調されている超分節的 (suprasegmental) な要素を習得することが不可欠となる。日本語のアクセント体系は「高低」であり、英語のアクセント体系は「強弱」であることを考えると、日本語母語話者にとって母語とは

全く異なるアクセント体系を習得することは、非常に困難である。そのような学習過程においては、「英語の発音に対する不安と苦悩」が顕著に現れるであろう。

また上で述べたことから、思うように発音が習得できない場合「英語の発音上達に対するあきらめ」の意識が生じることも容易に想像がつく。CPHを前提に、幼少期に英語を学び始めなかったから発音が上手でないのは仕方ないと自分を正当化したり、英語を必要とする職には就かないので英語の発音が不得手であっても問題ないと主張したりする学習者は決して少なくない。ただこのような学習者であっても、心のどこかには「英語の発音がうまければ」という思いは、少なからずあるのではないか。

7. 結論と今後の課題

今回の調査で学習者が発音の習得に対してどのように感じているのかについて、具体的な因子を明らかにすることができた。この結果から、教師にとって必要なことは、3つの要因が、常に学習者の中には混在しているという事実を認識することである。褒められることで第1因子の「英語の発音学習への積極的参加」が占める割合が増えることもあるであろうし、一方で間違いを指摘されると、第2因子の「英語の発音に対する不安と苦悩」の割合が増えることもある。そして、この第2の因子が取り除かれないままであれば、最終的には学習者の心理として、第3因子の「英語の発音上達に対するあきらめ」が生じてくるのである。教師は「不安と苦悩」や「あきらめ」を抱く学習者の心の内にも必ず存在している「積極的参加」の意識を引き出すような授業を心がけるべきである。

発音の指導は、それ自体に授業時間を割くことが難しいため、他の学習項目と関連づけていかに取り扱っていくかが今後の課題となっている。

また教師も学習者も他の学習項目を発音より重要とみなしているが、いまや発音教育は教えるべきかどうかまたは何を教えるべきかという議論ではなく、どのように教えるかという問題に直面している (Morely, 1991; Frasher, 1999)。また、このような現状が背景にあることを認識し、教師自身が発音に関する音声学や音韻論の知識、教授法を学ぶ必要がある。つまり、学習者に「積極的参加」を促すためには教師も発音教育に「積極的参加」をすることが求められているのである。

国際化が進む今の社会において、英語は英語母語話者とのコミュニケーションを想定したものよりも、むしろ英語を母語としない話者同士のコミュニケーションの手段としてより重要なものになりつつある。それ故に母語を異とする話者間であっても「理解される発音」、つまりはELFが目指す発音とはどのような発音なのかを明らかにし、その発音のための指導法、指導内容を確認するために、さらなる研究が求められる。

今回の調査に関しては、予備調査の性質が強いものであったため、質問肢の統一性にかけていたと思われることと、全体的に選択肢の「3」を選ぶ傾向が強かったため、選択肢の尺度についても見直す必要がある。また、今後は発音というものを言語教育の枠組みだけでなく、Frasher (2006) が提示するような認知的理論の観点や認知心理学的観点や、応用言語学的な視点を取り入れていく必要がある。今後はこのような視点からも発音教育について考えていくことで、より効果的な発音教育について明らかにしていきたい。

参考文献

- Acton, W. (1997). Seven suggestion of highly successful pronunciation teaching. *The Language Teacher Online* 21, 2.
- Barrera, Pardo D. (2004). Can pronunciation be taught? A review of research and implications for teaching, *Revista Alicantina de Estudios Ingleses* 17:

- 31-44.
- Boku, M. (1998). Student-centered pronunciation practice: More than “right” or “light”. *The language Teacher Online* 22, 10.
- Burgess, J. and Spencer, S. (2000). Phonology and pronunciation in integrated language teaching and teacher education, *System* (Oxford) 28, 2: 191-215.
- Couhahan, G. (1998). An activity for teaching intonation awareness to ESL/EFL students. *The Internet TESL Journal* 4, 11.
- Dalton, D.F. (1997). Some techniques for teaching pronunciation. *The Internet TESL Journal/III*, 1.
- Eskenazi, M. (1999). Using automatic speech processing for foreign language pronunciation tutoring: Some issues and a prototype. *Language Learning & Technology* 2, 2: 62-76.
- Frasher, H. (1999). ESL pronunciation teaching: Could it be more effective? *Australian Language Matters* 7, 4: 7-8.
- . (2006). Helping teachers help students with pronunciation. Prospect: a *Journal of Australian TESOL*.
- Lambacher, Stephen G., Martens, William L., Kakehi, K., Marasinghe, Chandrajith A., Molholt, G. (2005). The effect of identification training on the identification and production of American English vowels by native speakers of Japanese. *Applied Psycholinguistics* 26, 227-247.
- Macdonald, D. Yule, G. & Powers, M. (1994). Attempts to Improve English L2 Pronunciation: the Variable Effects of Different Types of Instruction. *Language Learning*. 44, 75-100.
- Macdonald, S. (2002). Pronunciation and views and practices of reluctant teachers. Prospect. *An Australian Journal of TESOL* 17, 3: 3-15.
- Moreley, J. (1991). The Pronunciation Component in Teaching English to Speakers of Other Languages. *TESOL Quarterly* 25, 3: 481-520.
- Otlowski, M. (1998). Pronunciation: What are the expectations?, *The Internet TESL Journal* 4, 1.
- Setter, J. and Jenkins, J. (2005) Pronunciation, *Language Teaching* 38, 1: 1-17.
- Underhill, A. (1996). Making Pronunciation Work for Your *Teacher Online* 20, 9.
- Wei, M. (2006). *A Literature Review on Strategies for Teaching Pronunciation*. (ERIC Document Reproduction Service No. ED491566)
- Wennerstrom, A. (1999). Why suprasegmentals?, *TESOL Matters* 9, 5.
- 藤原 愛 (2012) 「異文化理解に対する学習者の意識調査」育英短期大学研究紀要 第29号 pp.43-52
- 全国高等専門学校英語教育学会：高専英語教育に関する調査研究委員会 (2001) 「高等専門学校における英語教育の現状と課題—新しい高専英語教育を目指して—」学校の特色を生かした英語教育カリキュラム作成に向けての企画調査。平成13年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(1)) 課題番号(1389006) 調査報告

APPENDIX 英語の発音習得に関するピリーフ調査に用いたアンケート

英語学習アンケート調査

◇英語学習歴： 年 ヶ月

◇あなたが英語を学ぶ目的は何ですか。もっとも当てはまるものを選んで下さい。

1. 英語に興味があるから
2. 英語が必要だと感じるから
3. 英語圏の文化に興味があるから
4. 授業・受験があるから
5. その他 ()

次の1から20までの英語に関する文を読んで、5（とても当てはまる）から1（全く当てはまらない）のどれか1つを回答欄に記入して下さい。

1. 発音はネイティブ並にうまくなりたい。 ()
2. 発音が悪いと人前で英語を話すのが恥ずかしい。 ()
3. 海外に行かなければ英語の発音は上手にならないと思う。 ()
4. 正しく発音できれば単語を正しく綴れると思う。 ()
5. 発音が上手でなくとも将来困ることはない。 ()
6. 英語を幼い頃から学んでいればいるほど発音は上手だ。 ()
7. 日本人英語でも通じれば十分だ。 ()
8. 発音の理論的な学習は、正しい発音をするために役立つ。 ()
9. 学校の授業で発音学習の時間をもっとあるべきだ。 ()
10. 英語の発音は単語と単語の音のつながりが重要だ。 ()
11. 英語の綴りから発音を推測するのは難しい。 ()
12. イントネーションやアクセントを学習することは重要だ。 ()
13. 正しい発音のためには英語をたくさん聞くことが重要だ。 ()
14. 発音の学習に時間を割いている暇はない。 ()
15. 中学1年のときに比べると英語を発音する機会が減った。 ()
16. 発音がうまくなる方法があるならとにかく知りたい。 ()
17. 発音記号が読めれば正しい発音ができると思う。 ()
18. 自分の発音が正しいかどうか自信がない。 ()
19. 正しい発音を頭では理解していても実際に発音できない。 ()
20. どんなに英語の知識や能力がある人でも、発音が悪いと英語ができない印象を覚える。 ()

〔2012年11月30日 受付〕
〔2013年1月10日 受理〕